



教訓
八
十
五
歌

下

口 9
4456
3



あのはん
松
ぬ
し

に

酔
虫
齧

ゆ
ち
い
袋

酔
づ
い

酔
い
せ
ね
ど

酔
い
ま
ぐ
い



酒きいりる酒は馬を酔て中すり有りいりる事いり酒小科わさるや色り
あつて人いりる色に科有るや不義いりり色いりりあはれ色いりり色いりり
捨く人道をさる酒と捨く礼はせさるるさるる酔ねり人それ色いりり

酒
齧

て

手紙

手紙

手紙

手紙

手紙

手紙者ありて理不盡ふは御座るは喧嘩をこの世にわたりて言はせしもの者
相子にまゝに人なきも堪へて身一なりて議し短氣ハせんといふ



下巻一

あ

仇と

あ

浅

あ

換

世の誘ひ人門の乳母にも用事ありて人人情は世に人と不和ふなり人の本意に
あはれみありて人のあはれみは何れも人の仇と知りて人の世活にもあはれみありて
あはれみありて人のあはれみは何れも人の仇と知りて人の世活にもあはれみありて



き

ほろろと

さし

かしき

ちりと

ほろろと人の

さげすまことわ

男女にむき人目をうつらぬほろろとよるあをむととくも常の心
かみさるる人の陰日向とばあつらつとあつらるるれい常の心
常の心



き

きつち

きつち

きつち

きつち

きつちの第一

女子のむき人目をうつらぬほろろとよるあをむととくも常の心
かみさるる人の陰日向とばあつらつとあつらるるれい常の心
常の心



ゆ

優ゆくと

夢ゆう現の

ゆんよう

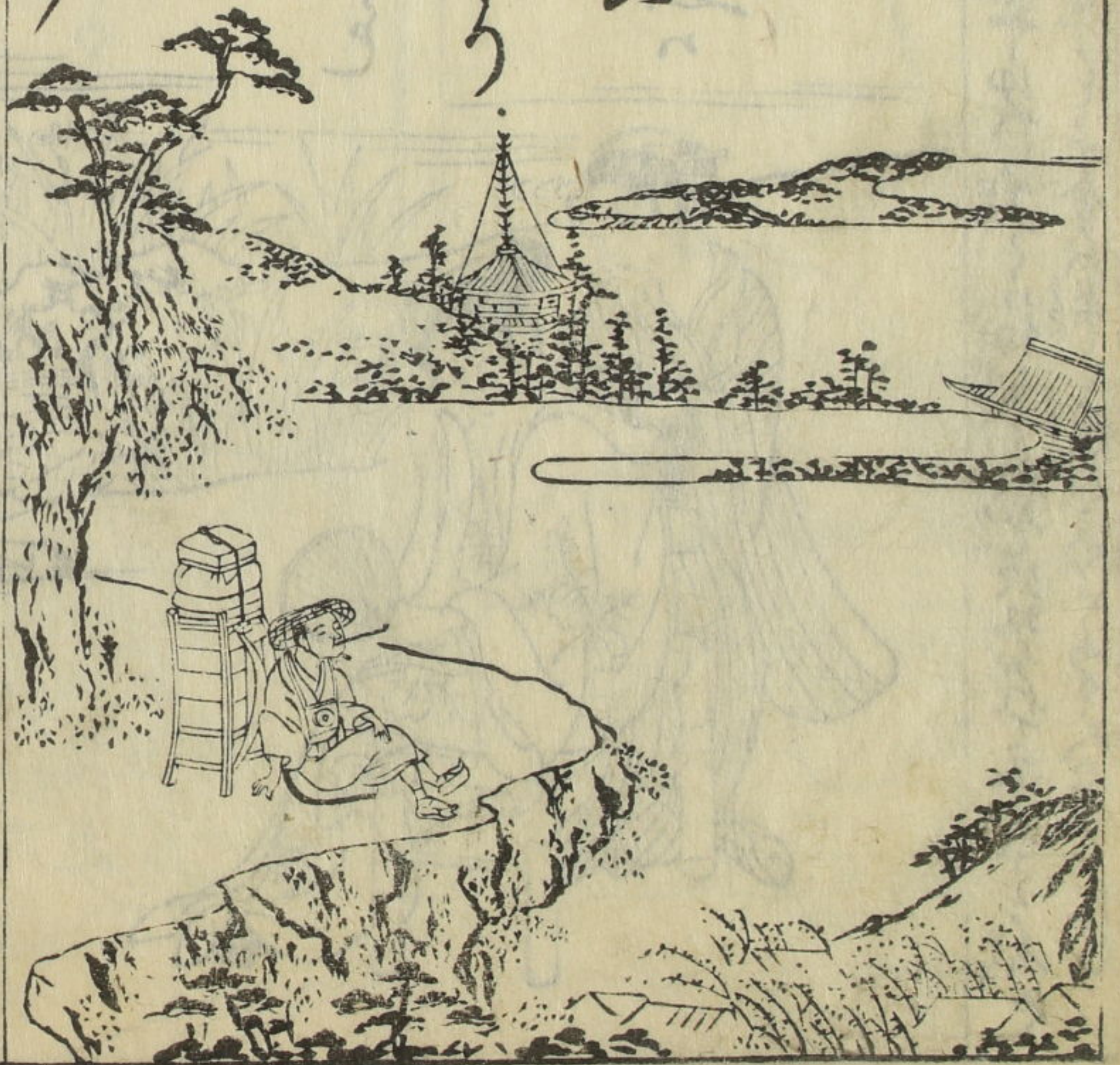
ゆ甲髪

ゆと

ゆく

ゆく

富貴ふ貴きのそそれくの寿業ぎをままげらふのくと善者じをく愛いはればはらいふとも
まがはらはらるる慮りをけして近きと遠くともわからずの中ちにあらわるま也



め

眼め乃な花はな

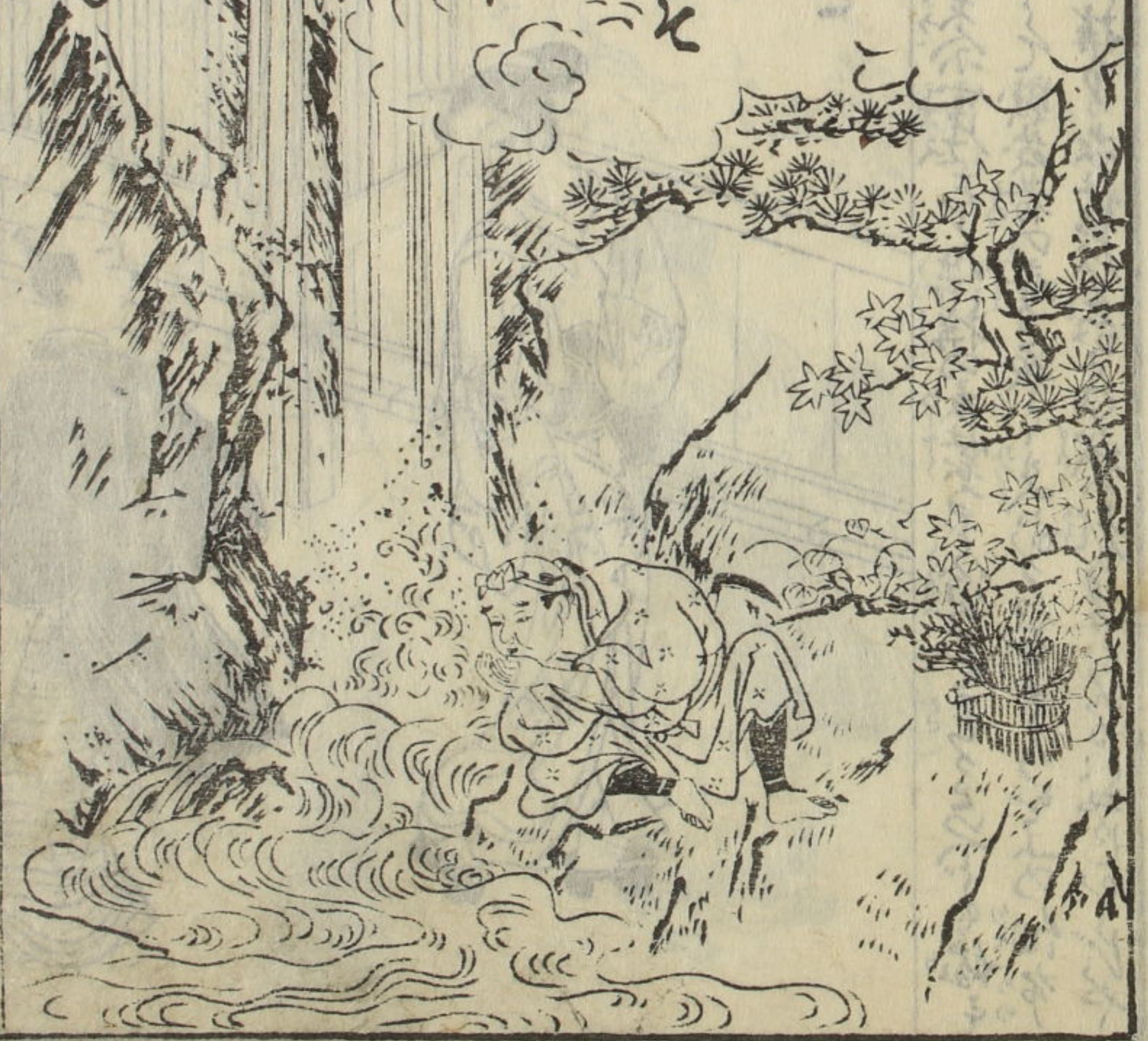
真ま加かのやどと

先まづつ美みくく

目めゆと

ゆらきる

あらららけま



正ま直ち正し治ち小こ春はるのここの天あま地ち乃の真ま理り鬼おに神かみの感應おんあらはられしるとも
そのまり子こ孫そのまり家留いまりのまり今新あらたいまのまり也

み

眉目くまら

えりく行ふ

えりく

身のかきまぬ

身くまらき

読小女氏にして其の興らん財女も美余官仕とて格捕の衣装をくまらきとて下も婦
れ押してハ外にほこしほこしとて財女者の妻とくまらきとて下も婦
胸のまの程公うらをて妻は信捕の衣装をくまらきとて下も婦



し

知まばえ

四書や五経

まの教

子細

まのま



學文を志して道にまゐる己が非あつて己とほしむの理と知らざる學文はくまら
志を文章を志する己が非あつて己とほしむの理と知らざる學文はくまら
志を文章を志する己が非あつて己とほしむの理と知らざる學文はくまら



人の眞に芳らば勝ん培んを誓ひ争ひ我勝邪めて人のあはれ憐れんをわく
 の也古語小勝も大勝むの敵をわたりて其れをわびるはくともさるべし

せ

詮もる哉

世間をわ

情をわ

せりわ

千



人の幸い書ふは世にありとも又争ひの思ふは人にも見えず其れは老人の物なりをな
 我徳とすは他の人の文有るは我徳のわびなりは準電こそたがひ

も

文育か

者でも古

物

き

諸共

す

速すみやか

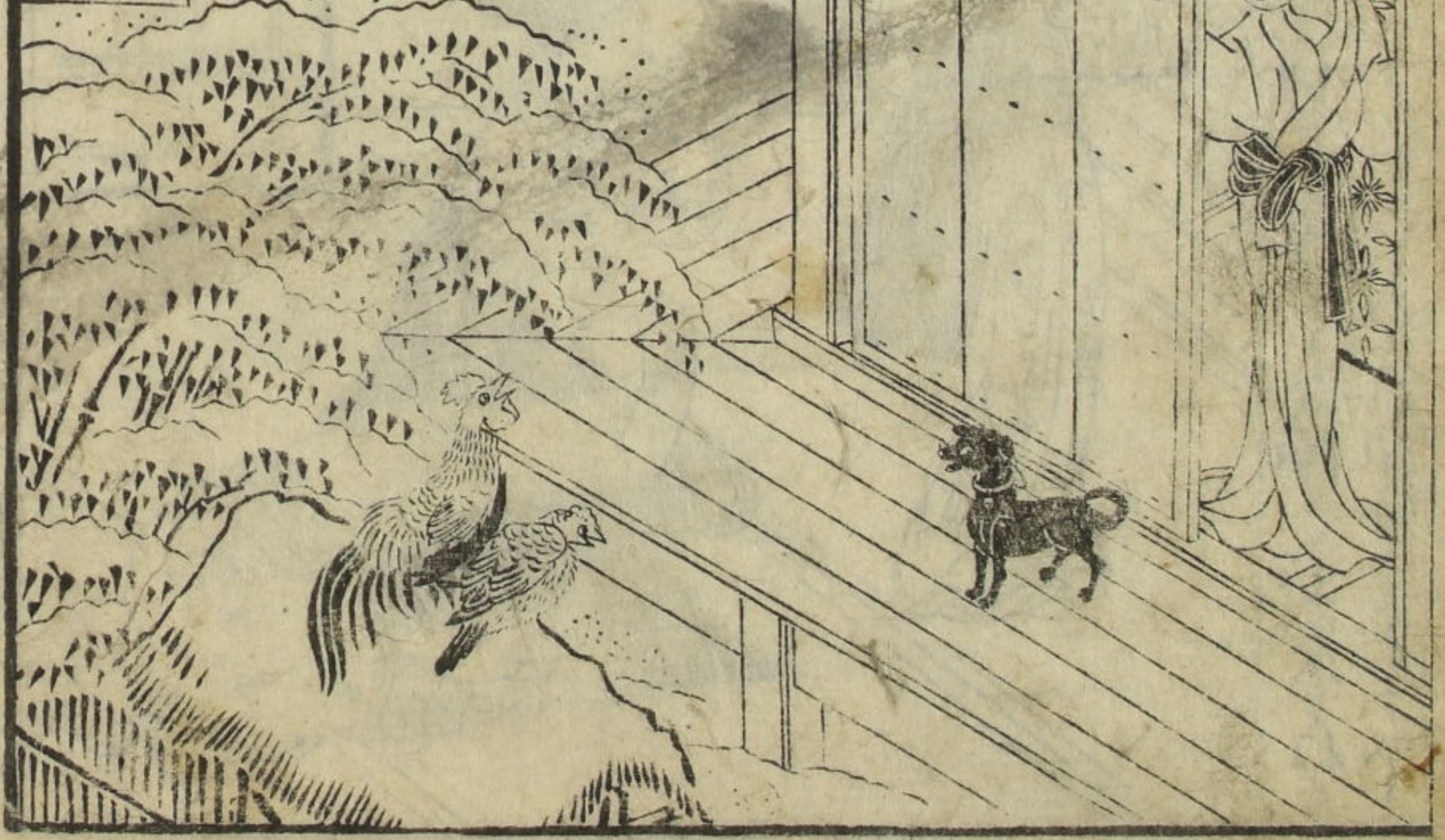
すべしよ月つき事こと

とふぞよ

思おも悔くどめ

すべしよ

後悔こうかいはふれおきしは唯ただおのこがねてうりはさ
悔くむはしは初はつお思おもい出いくは心こころざ事こと也



宇治大納言お詔うぢ だいなごんのおみこと

全部三冊 中世君臣の事記を和文
あてきくこころごとく

女にょ殺ころ探たん文章ぶんしょう

全一冊長玄海堂と奉

小室菊女とのま濃川泉女へおくりし
文章は女の心ゆく女は情状はく
みまか乃存かかたり

新あらた摺ずり草くさ

全部二冊

陰徳わねと陽徳ありし古人の言行
を記しうれ強入ひきき之中を記し
てあり長哉きむむ候ふそあり

子こ代よ元もと州しゅう

全一冊後入怪寓先生作

先生の中興の偏家子して其徳のさる
あり人のまけつ所多きを母とてま
きし一かた虫乃めてこれ書り

寛政八丙辰年五月

江戸宝町二丁目 須原屋市を傳
大坂心舟橋首久富吉所 河内屋八を傳

